府がくやく便り　No.5　平成 23 年　12 月

第６１回　全国学校保健研究大会

日時：平成２３年　１０月２７日（木）・２８日（金）
場所：静岡県　コンベンションアーツセンター｛グランシップ｝

報告　　副会長　大村洋子

記念講演

「学校現場における発達障害を持つ子どもたちへの対応」

講師：浜松医科大学児童青年期精神医学講座　特任教授　杉山　登志郎

１．特別支援教育の対象児はどのくらいいるのか
　学習障害・・ＡＤＨＤを加えて１０％前後の報告
　日本では、文部科学省（２００３）通常クラスの 6,3%

２．発達障害はなぜ増えているか
＊各々は、それぞれが原因ではないが、リスクの積算
　晩婚化→出産年齢の後退→低出生体重児の増加→発達凹凸の増加など
　タバコ、環境ホルモン、刺激の絶対値の増加、減少、ストレス・・

３．発達凸凹
　病気のレベルの閾値は、超してはいない状態
　素因レベルでも状況によっては、不適応が生じる。
　認知の凹凸は、決してマイナスとは限らない（隠れた実績を、持つ人あり）
　　例；エジソン、アインシュタイン

４．発達障害とは
＊定義：子どもの発達の途上において、発達の特定の領域に、社会的な適応の問題を引き起こす可能性のある凹凸が生じたもの

５．境界線知能の問題
　ＩＱ７０～８０のグループ。教育が一番影響を受けるグループ。
　被虐待児にきわめて多い・・体罰されると、脳の前頭前野の体積が減ってくる。

６．自閉症スペクトラムの世界観
＊体験世界の違いを、理解する→光をあてて、対応が必要
　過敏性のため、人との接触が楽しくない、他人の体験と自分の体験と重ならな
　い、全体の把握や曖昧な把握が出来ない、今と過去が重なって体験される

７．注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）の症状
　不注意、多動、衝動的（学校の窓の３階から飛び降りたらどうなるかわからない）
＊ＡＤＨＤの治療・・薬物治療：８割程度有効・・コンサータ・アトモキセチン
　行動療法、周囲の刺激を減らす、中央の最前列に座らせる
　早寝早起き、おだてまくる
＊ＡＤＨＤ＋子ども虐待　→　１５歳以上、非行がとても多くなる

８．学習障害
　純粋な例は、成長した時に、大きな問題はない
　社会性の方が大事

９．発達障害と子ども虐待
　例：①　３３歳女性の母親・・ＩＱ６０前後
　　子どもへ、ネグレクト
　　②　１１歳不登校（自閉症スペクトラム）
　　母が２０年を超える不眠、うつ病、スクールカウンセラーは
　　継続的な相談。入院治療にふみきる。→軽快

１０．必要な事・大事な事
＊教育者　：肯定と愛着
＊自分自身まあまあだ。万能ではないけど、自分はそこそこやれているのではないか。

まとめ

・入学前にためし教育をお願いする。→ちょっと問題→無理をさせない→できるようになったら、普通クラスに戻す（支援クラス　⇔　普通クラス）
＊どんな対応をすれば（こじれている場合）
①安定した自信をもった大人の存在が、子どもを救う
②　重い神輿は、みんなで担ぐ（学校だけで、無理なら地域で連携）
③　教育・福祉・医療の連携　⇒　相談できる人材を育てる
④　社会への発信も必要・・子育てと教育に、競争意識を持ち込まない
　長期的費用効果をきちんと計る。
＊発達凹凸は、決してマイナスではない。・・教育サイドの腕の見せ所
社会的な大人へと導いていく。

文責　京都府学校薬剤師会　守谷まさ子